

研究ノート

子育ての実態と親のニーズについて

～地域調査の結果と自由記述の分析を通じて～

櫻谷真理子¹⁾

A study on the needs of mothers rearing infants and social support

SAKURADANI Mariko

This study examined the appropriate social support for mothers who care for their infants. In the study, 345 mothers completed questionnaires that were designed to clarify cognition about child rearing. The results showed that about 30% of them had experienced childcare before having their own child; most of them thought that parenting was more difficult than they had anticipated; 68% of them became irritated with their children; 54% answered that they were not suitable parents; 29% of them had no contact with neighbors; 29% of them would like to use a day nursery every day; and 49% would use it temporarily.

These findings suggest that infant-care services and social support must be accessible whenever mothers need it. We believe that nursery schools should provide more opportunities for learning parenting skills to reduce anxiety concerning child rearing.

Key words : Parenting, Anxiety Social-support, Day nursery

キーワード：育児，不安，社会的支援，保育所

I はじめに

地域における安全な遊び場の減少など子育て環境が悪化しており，親同士のつながりもますます希薄化している。しかも，親になるまで，乳幼児の世話をした体験がほとんど無い人が増えており，親準備性の低下が憂慮されている。

さらに，早期教育を煽る風潮や子どもを立派に育てることに大きな価値をおく文化を背景に，母親の教育責任は高まっており，競争社会を生き抜くために，何でも早くできる子どもに育てなければいけないという焦りやプレッシャーが生じやすくなっている。

そのうえさらに，女性のライフスタイルが多様化する中，母親自身の生き方や自己実現をめぐる葛藤や悩みも生じている。母親役割だけで，一生を終える人が多かった時代と比べ，子育て後の人生が長くなっており，将来の生活への不安を抱く人も多くなっている。

子どもの教育費の高騰もあり，母親業に専念する生活を長く続けることができず，仕事への復帰を急ぐ傾向もみられる。一方，働く母親たちは，仕事と子育ての両立に悩み，子どもに十分なことをしてやれないという負い目を持っている人も多い。

このように，子育て中の母親たちは，子どもの発達やしつけの悩みに加え，母親としての役

1) 立命館大学産業社会学部

割を果たすことの矛盾や葛藤など、多くの悩みを抱えていることが考えられる。そこで、本稿では、地域調査の結果と自由記述欄に寄せられた198人のさまざまな意見に基づき、母親たちの育児意識やニーズについて分析し、今後の子育て支援のあり方を検討する。

Ⅱ 調査の方法

1. 対象

滋賀県の保育園（2箇所）と京都市の幼稚園（1箇所）を利用している母親と、京都市の住民基本台帳から無作為に抽出した0歳から5歳の乳幼児を養育中の母親を対象にした。

2. 方法

保育園、幼稚園を通して協力を依頼、配布し、園で回収した。住民基本台帳から抽出した家庭へは郵送による配布、回収を行った。調査時期は、2003年、6月～7月である。595配布し、回収数、回収率は保育園141（70.5%）、幼稚園144（73.8%）、在宅調査60（30.0%）で有効回答数は345であった。そのうち、自由記述欄に198人からの意見が寄せられた。

Ⅱ 結果と考察

1. 子育ての実態

調査結果の詳細については、「今日の子育て不安・子育て支援を考える」（櫻谷：2003年）ですでに報告している。しかし、以下再度、質問紙調査の結果についても簡単に触れながら、自由記述を中心に子育ての実態や母親の育児意識、支援ニーズについて把握し、考察する。

1) 基本的属性

母親の年齢は約8割が30歳代である。20歳代が1割強、40歳代が1割弱であった。父親

の年齢は30歳代が約7割である。仕事を持つ母親と、専業主母の割合は約半々である。子どもの数は1人：35.1%、2人：47.8%、3人：15.7%である。性別では女兒が男児よりやや多かった。

2) 時間的にゆとりの無い生活、苛立ちや焦り

「子育ては楽しい」という回答が約7割あり、多くの母親たちが子どもを育てることの喜びを感じていることが把握できた。しかし、その一方、子どもに苛立つことがあるという回答が68.4%あった（表1）。「育児の心配ごとや悩みがある」という回答は72.5%（表2）、「十分なことをしてやれない焦りを感じることもある」という回答は61.5%であった（表3）。

また、「自分は育児にあまり向いていないと感じる」という回答は53.6%であった（表4）。むしろ、専業主母の方が働く母親よりも「育児に向いていない」と思う割合が高かった。「子育てに疲れることがある」という回答は82.3%であった（表5）。「時間的ゆとりがほしい」とい

表1 子どもといるとイライラしてあたりちらしたくなる場合がありますか

	回答数	パーセント
よくある	31	9.0
時々ある	205	59.4
あまりない	96	27.8
全くない	12	3.5
不明	1	0.3
合計	345	100.0

表2 育児の心配ごとや悩みがありますか

	回答数	パーセント
よくある	49	14.2
時々ある	201	58.3
あまりない	89	25.8
全くない	6	1.7
合計	345	100.0

表3 子どもに十分なことをしてやれないという焦りを感じるがありますか

	回答数	パーセント
よくある	54	15.7
時々ある	158	45.8
あまりない	119	34.5
全くない	14	4.1
合計	345	100.0

表4 自分は育児にあまり向いていないと感じていますか

	回答数	パーセント
よくある	30	8.7
時々ある	155	44.9
あまりない	132	38.3
全くない	27	7.8
不明	1	0.3
合計	345	100.0

表5 子育てに疲れたと感じていますか

	回答数	パーセント
よくある	81	23.5
時々ある	203	58.8
あまりない	55	15.9
全くない	3	0.9
不明	3	0.9
合計	345	100.0

表6 もっと時間的なゆとりがほしいと思うことがありますか

	回答数	パーセント
よくある	165	47.8
時々ある	152	44.1
あまりない	24	7.0
全くない	1	0.3
不明	3	0.9
合計	345	100.0

う回答は91.9%もあった（表6）。

自由記述欄にも、「子どもとゆっくり遊ぶ時間が少なく、子どもの情緒の安定が心配です。また、母親としての責任を果たしているか（ちゃんと母親できているのだろうか）など心配だらけです」と、子育てのゆとりが持てず、これでいいの不安にかられる気持ちを書いた人がいた。

また、「仕事をしている関係で、朝はバタバタ、夜もバタバタで、気持ちのゆとりを持って子どもに接することができず、反省しています。園での生活は、一生懸命がんばっている事がすぐわかります。家では“ママ”“ママ”とすぐ甘えるので、相手をしてあげなければと思うのですができません。最近、子どもの顔つきが変わってきたような気がします」といった記述からも、母親の不安がうかがえる。

「もっと子どもとゆっくり過ごせると思っていたが、現実には、仕事と家事で精一杯で、一緒に遊んだり、笑って過ごすことが少ないので、時々落ち込んでしまう」と書いた人もいた。働く母親たちが時間的にも精神的にもゆとりの無い日々の生活に追われ、子どもの相手をしてやれないという負い目を抱いていることが推察される。

しかし、専業主母の中にも、「子どもに手をかけてやることができず、ていねいに対応できていないといつも感じます。本当に自分の子どもはかわいく、大切に思っているのも、もっと気持ちにゆとりを持って、ゆっくり子どもと接したいと思っています」と書いた人がいた。

質問紙調査においても、母親の平日の自由時間は約1時間かあるいはそれ以下という人が全体の約6割であった（表7）。働く母親も専業主母の母親も、自分のために使う時間はほとんど無い生活状況にあることがうかがえる。

なお、「季節の良い時は散歩など戸外で遊べるのですが、冬や雨の日はこもりがちになり子

表7 お母さん自身のために自由に使える時間は平日の場合で一日平均どの程度ですか

	回答数	パーセント
全くない	24	7.0
30分以下	69	20.0
1時間くらい	110	31.9
2時間くらい	89	25.8
3時間以上	39	11.3
不明	14	4.1
合計	345	100.0

どももストレスがたまり、私もイライラして子どもにあたってしまう」と、母と子が狭い空間に閉じ込められた生活を余儀なくされていることによるイライラが募っていることが推察される内容の記述もあった。

3) 感情的に子どもを叱ってしまう

子どものしつけ方について質問したところ、叱るときには、大きな声で叱る(85.8%)、叩いて叱ることもある(55.1%)という回答であり、特に、反抗的な態度やよく泣き、ぐずるといったことや、かんしゃく、駄々こね、言うことを聞かないといった場面のしつけに悩んでいることが把握できた。

自由記述欄でも、「叱り方に悩むことがある。何回か口で説明してもなかなか聞かず、口で言ってもわからないならと手をあげてしまいます。すぐにごめんなさいとその時言うものの、また同じ事をするので疲れてしまうことも度々です」と、体罰を用いてしまうことが書かれていた。また、「ヒステリックに大声で怒鳴ってしまうが、なかなか聞かないので、手が出るが多くなった。口で言い聞かせたいと思うのですが・・・(後半略)」といったことも書かれていた。

「自分が疲れている時など、わかっていてもつい感情的になって、怒ったり、叩いてしまう。

後で冷静になった時に“かわいそうな叱り方をした”、“もっとゆったり見てやれなかったのか”と自己嫌悪に陥るが、また繰り返してしまう(中略)。子育てが私だけにかかっているようで、子どもの悪いところが見えると、それがプレッシャーとなり、余計イライラする。短気にならずに、子育ては気長にと思っているが・・・」といった悩みもあった。

あるいは、「ほとんど自分の時間が無く、気持ち追いつめられているような気がする」とあり、「こんなに感情的になるとは思わなかった」とか、「子どものためと思っても、結果的に叱ってしまい、自己嫌悪に陥る」などといった記述がなされていた。

多くの母親たちが時間に追われ、慢性的な疲労が蓄積する中で、そのつらさを誰にもわかってもらえないとき、母親たちの怒りや苛立ちが子どもに向かう恐れがあることがうかがえる。そのことで母親としての自信が低下したり、愛するわが子に思わず感情的になり、激しく叱りつける自分に驚き、自己嫌悪に苦しむという状況に陥ってしまうようである。

4) 子育てのイメージと現実の生活との落差

親になるまでに、赤ちゃんを抱いた経験のある人は67.8%、あやしたり、遊んだ経験のある人は67.2%であった。その一方、ミルクや離乳食を与えた経験やオムツを替えた経験など、子どもの世話をした経験のある人は約3割に過ぎなかった。

なお、出産前に抱いていた子育てのイメージと現実とのギャップを感じたことのある人は52.5%いることがわかった(表8)。「思っていたより楽しい」といった肯定的内容を書いた人は16人(12.1%)に過ぎず、「夜泣きが思ったより大変」、「3時間おきのミルクが大変」など子どもの実際の世話が予想以上に大変だという

表8 お子さんができるまで子育てに対して抱いていたイメージと現実の子育てとギャップがありましたか

	回答数	パーセント
ない	156	45.2
ある	181	52.2
不明	8	2.3
合計	345	100.0

回答が76.5%（101人）に及んだ。

例えば、「子どもが大好きで早くお母さんになりたくて産んだ子なのに……。今の私は母親失格ですね。感情のまま叱り、怒鳴っている。でも、やっぱり可愛いから続けられるのです。それでも『お母さん、お母さん』って言ってくれる。こんな私にでも……。』と、自分の思い描いていたやさしいお母さんをできない現実に苛立ち、自信を失うこともあるという心境を語ってくれた人もいます。

また、「独身のころは子ども好きで保母（保育士）の仕事もしていたくらいですが、今は自分の子どもを育てるのが精一杯で、昔の子ども好きが嘘のようになってしまいました。それだけ余裕がなくなってしまったということでしょうか」という母親のように、子どもが好きだという気持ちがゆとりの無い生活の中で、消えてしまうこともあるという実態を伝えてくれた人もいた。

5) 孤独な育児環境—近所付き合いは挨拶か立ち話す程度—

近所付き合いは、「会えば挨拶する程度」「立ち話す程度」が約半数を占めており、孤立している家庭が多いことがうかがえる。「子ども同士行き来する付き合い」をしている人は3割弱であった。さらに、「子どもを預かり合う」といった育児の手助けのできる付き合いをしている人はわずか6.4%で、全体の1割にも満たないことがわかった。なお、近所で子連れでの

付き合いをしている家は何軒あるか尋ねたところ、1～2軒という回答が45.2%、3軒以上が24.3%であった。一方全く無いという回答が29.0%と全体の3分の1弱もあった。

こうした結果を反映するような内容が、自由記述欄にも書かれていた。例えば、「少子化の影響のせいか、それとも子どもを遊ばせるのに安心した環境でないせいか、ふだん公園へ出て子ども達が大勢で遊んでいるという風景を見ることがなくなりました。同年代のお友達と遊ばせるために、車で移動して行かなくてはなりません」といったことから子ども同士で遊ぶ機会も乏しくなっていることがうかがえる。また、「転勤族で実家も遠く、子どもを預かってもらうところがない」といった悩みも記されていた。

「現在、マンションに住んでいますが、近隣は交通量も多く、路地で三輪車やボール遊びといったことは全く縁遠い環境にあります。住環境から必然的に生活パターンが決まるといっても過言ではないと思います。（中略）近所とのお付き合いもあまりなく、子育て中は（夫の理解の皆無）、疎外感と孤独感にさいなまれ、私にとってはとてもつらい時期でした」と、誰からも理解されず、助けてもらえない孤独感に悩み、子育てに苦しんだ日々について語ってくれた人もいます。

6) 夫の育児参加を期待できない現実

夫は買い物やごみ捨てをしているという回答が調査では多かった。一方、洗濯や食事作りを「全くしない」という回答が約半数もあった。なお、排泄（うんち）の世話を「全くしない」父親が15.7%いることもわかった。子どもが病気のときに仕事を休んで看病したことが全く無いという回答は実に53.9%であり、責任の重いことは妻任せの実態がうかがえる。

こうした現状について、ある母親は「夫はと

でも子煩悩で子どもの世話をよくしてくれるが、平日は仕事で全くといっていいほど家事、育児の協力は望めません。結局、私が仕事、家事、育児をしており身体的につらいです。子どもが一番父親を必要としている時期に、父親は仕事で子どもと接する時間がとても短いというのが現状です」と語っている。共働きにもかかわらず、夫の協力が得られない状況にあることがうかがえる。

妻たちの夫への評価は、「満足している」が35.9%、「もっと協力してほしい」が25.6%、「これ以上は無理だと思う」が23.4%で、「満足していない」、「とても不満である」の合計は5.3%であるという結果であった。夫の家事・育児参加について満足している人は約3人に1人にすぎないことがわかった。

自由記述欄には、「他の家庭を見るとまだうちの家庭は幸せだと思うのですが、自分ではわかっていても憂うつになることがあります。主人があまり協力してくれないとなぜ私ばかりとかつい思ってしまう、腹が立つ事もあります」といったような夫への不満の声が多く寄せられていた。

「わが家の一番の悩みは、夫の仕事が忙しく、本当は育児に参加したいと思っているのに、出来ないことです。私が相談したくてもいつもイライラしたり、意気消沈気味で、話しかけられません。帰宅時刻も深夜になることがよくあります。保育園で、他の父親を見ていると、お迎えや育児を分担しているので、差をとても感じます。お互い仕事をする身として、文句一つ言えませんが、夫とのコミュニケーションが取れずに困ります」と、仕事に忙しい夫と話し合う時間すら無いという訴えもあった。夜9時過ぎに帰宅する父親が43.5%であり、父と子のふれあいの機会も乏しいことがうかがえる（表9）。

「社会のシステムとして、子育てしやすいように労働時間の短縮が必要。父親の育児参加を

表9 お父さんの帰宅時間はどれくらいですか。一週間のうち最も頻度の多い場合でお答えください

	回答数	パーセント
午後7時まで	34	10.6
午後7時台	51	15.9
午後8時台	66	20.6
午後9時台	56	17.5
午後10時～11時台	70	21.9
午前0時以降	13	4.1
不明	30	9.4
合計	320	100.0

可能にするような労働環境を整備するなど、国の子育てを支える制度の拡充が一番の課題と思う」といった父親の育児参加を促すためには、制度的な改革が必要だという具体的な提案もあった。また、「父親も育児に参加するため、休日だけでなく平日でも気がねなく休めるシステムを作ってほしい」という要望もあった。

2. 子育て支援に対する意見や要望

子どもの遊び場の整備や保育所の充実、経済的支援などたくさんの要望が寄せられた。それだけ、子育て環境が悪化し、母親一人の育児に限界が生じているといえよう。

1) 子育て環境の改善、経済的支援

「安心して子どもを遊ばせる場所が少ない」という回答が最も多く、53.3%、次に、「子育てにお金がかかりすぎる」が48.7%、「受験やいじめなどで子育てがしにくい社会」が45.2%、「母親ひとりに子育ての負担がかかりすぎる」が28.4%、「労働時間が長すぎて子育てがしにくい」が23.8%であった。

自由記述でも「近所に子どもを遊ばせる場所があまりない。近くの公園は砂場も無く犬の糞だらけで、しかもゴミ箱も無くタバコの吸殻や食べかすが散乱している。雨の日はそこすら連

れて行けない。(後半略)」といった、公園の管理がなされずに、荒れていることを指摘する意見も多かった。また、「国からのお金の援助がもう少しほしいです。1ヵ月5000円の児童手当では育てていけません。本当にしんどいです。このままでは2人目の子も考えられません」といった意見がみられた。

また、「教育にお金がかかりすぎると思う。子どもをたくさん欲しいとは思っても先の事を考えると2人までだと考えてしまう。不景気の中、そう考える家庭は多いと思います」といった意見や、「子育ての経済的負担が大きすぎる。将来的に不安があると、子どもを2人、3人と生み育てていくことを考えにくい。だから、どんどん少子化が進み、ますます世の中が大変な状況になっていくと思います。医療、教育にかかる経済的負担は軽減しなければならないと思います」といった意見が述べられていた。具体的な対策や家族への支援がなされないと、少子化の進行は防げないという指摘もあった。

2) 子育て相談や集団保育への要望

3歳未満の子どもの保育についての考え方は「専門家による保育」が望ましいと考えている人が28.8%、「母親が育てるが、時々保育所や児童館などで行われる保育を」と考えている人が48.7%、「自主的な子育てサークルなど」が望ましいと考えている人が3.5%、「母親が育児

に専念すべき」だと考えている人は3.8%という結果であった(表10)。

つまり、母親だけで子育てをするのではなく、どの子どもにも保育の機会が提供されることを望んでいることがうかがえた。なお、子どもを気軽に安心して預けることができ、相談にも応じてもらえるような場所を地域につくってほしいという意見も多かった。

「子育ての悩みを気軽に相談できる所(子どもも遊べる場所)、困った時にすぐ行ける所があれば良いと思います。平日PM6:00まで、できれば土・日も開いている所」。「買い物へ行く際、子どもを一人残して行くことができないので困っている友人もいます。気軽に一時預かり等がしてもらえる施設を作ってほしいと思います」といった要望も多かった。

なお、「最近、幼稚園入園前のプレスクールを行うモデル地域の話を目にしたが、2歳半からでも半日だけでも行かせることでいたら、自分自身にも余裕も生まれてもっと笑顔で子どもと接することができる気がします」と書いた人もいた。

また、「子育て支援として、地域にコミュニティスペースがあるといい。核家族の進捗中、世代間を越えた交流ができる場が各地域に必要だと思う。おじいちゃんおばあちゃん世代の人が子育ての知恵を伝えたりしていくといいと思う。育児能力が低下してきているといわれる中、

表10 三歳未満の子どもの保育についてどうお考えですか

	回答数	パーセント
できるだけ専門家による保育も受けさせたい	99	28.7
時々保育所や児童館などで行われる保育を受ける機会があればいい	168	48.7
自主的な子育てサークルなどを通して行いたい	12	3.5
母親が専念すべき	13	3.8
その他	12	3.5
不明	41	11.9
合計	345	100.0

そこを人と人が関わりあう中で支えあっていくことが大切だと思う。地域の中で、いろんな人が、自分の子の事を知っていてくれることが安心につながる。何かあった時も知っている人に声を掛けてもらったり、危険を防げるような地域のつながりがあるといいと思う。社会参加したり、サークルに参加している人は安心だけど、家に閉じこもって悩んでいる人が大変だと思うので、そういう人達を救う手立てがあるといいと思う」という提言もあった。

さらに、「母親が一人で子育てをしていると、一人よがりや偏った育て方になると思う。社会の子どもという見方で、もっと複数の人が一人の子どもを見つめるようにしたら、虐待や無理心中など減っていくと思う。そういう意味では保育園、幼稚園、育児サークルなどは重要だし、引きこもったお母さんを作らなくて良いのにといつも思います」といった意見もあった。

これらのことから、家庭保育児も通えるような保育の場や子育て支援の拠点を地域につくり、親同士をつなぐためのコーディネーターや学び合いが生まれるようなサポートがなされることが求められているといえよう。

3) 保育所への期待と要望

「0歳から保育園に入れることになりに抵抗があったのですが、少子化の世の中、保育園に入れでもしないと同年代の子と遊べないので、保育園へ入れました。今通わせている保育園は、自然の中で遊ばせてもらえるのでとくに気に入っています」といった内容から、保育所が親を支える重要な役割を果たしていることがうかがえる。

しかし、その一方では「保育園の保育時間が限られているので、困る事があります。完全週休2日制の会社ばかりではありませんから、保育してもらえない日に仕事がある時など、そのやりくりが苦労します」とか、「保育園へ通っ

ているのですが、病気の時でもどうしても会社に行かなくてはならない時があるので、病児保育をしてくれる施設が近くに欲しいです」といった悩みも寄せられている。

つまり、働く母親たちは、保育料が高いことや保育時間による制約、職場の理解が得られにくいことなどが大きな悩みになっている。保育時間の延長や休日保育、病児保育への要望も多かった。

また、「保育士さんは日々の保育で忙しいので相談しにくいと感じます。保育士さんと別には、育児カウンセラーのような方がいて下さると相談しやすいです」といった要望もある。なお、「仕事をしています。保育園のうちはいいのですが、子どもが小学校へあがった時に学童保育は充実しているのか、長時間預かってもらえるのだろうかなどの不安があります」などと学童保育の充実を望む意見もあった。

なお、「4月から地区の一時保育を利用して、やっと自分の時間を持つことができるようになりました。でも1日10人ということで、予約はすぐにいっぱいになります。何か急用ができたとき、通院などではとても利用できる状況ではありません。地区では現在2ヶ所の保育所で一時保育をしています。今後もっと気軽に預けることのできる施設が増えていくことを望みます」といった要望があった。

「現在、公立保育園の一時保育を利用していますが、キャンセル待ちのことも多く、時間も5時までなので、幼稚園や学校等の行事があると迎えがぎりぎりです。夜の預かりもあれば助かるのですが・・・。また、一時保育も混んでくるとリフレッシュやレジャー、母親の気晴らしでは利用しにくいように思います。母親のリフレッシュは子育てで必要で、子どもにとっても良い結果が得られると思いますが、周りの目がまだまだ冷たいのを感じます(後半略)」といった意見もあった。一時保育を利用しやすく

するためには周囲の人々の理解も必要なことがうかがえる。

4) 母親役割の問い直しと仕事と子育ての両立支援

「出産後、義母は専業主婦のために『自分は一人で育ててきたのに、どうして出来ないのか、何故育児不安になるのか理解できない』といわれ、協力を得られなかった（後半略）」といったことから、子育ての先輩である女性たちが、母親なら子育てができて当たり前という「母性観」に今なおとらわれていることがうかがえる。

また、「少子化政策における矛盾点の解消。現在の社会機構では、独身女性と『既婚子なし』女性しか十分に労働できない。仮に労働できたとしても、家庭に多大な犠牲を払うことになり、親子関係にも影響が生じる。満足のいく仕事をしたければ一生独身でいるか子どもを出産しないでいるとしか思えない。こうしていても育児のために有能な女性のスキルがスポイルされているかと思うと非常に惜しい」といった子育てと仕事の両立が困難な社会の状況を指摘した意見もあった。

さらに、「子育てについては、いまだに女性の役割とする認識があり、例えば最近の少年犯罪に対する報道でもいかにも母親の育て方を悪とする見解に疑問を感じます。なお、共稼ぎがいかにも子育てにとって悪であるような言い方……。『女性の社会進出』をおおわりには心の底から歓迎していない社会であるような気がしてなりません。個を重視、ジェンダーフリーと叫ばれているものの、女性にとってはまだ生きにくい社会。専業主婦であれ仕事を持つ女性であれ子育てはみんなですするという意識を根付かせることから始まる気がします」という指摘もあった。

「ワークシェアリングで長時間労働を減らして、女性も適度に社会に出られるようにしてほ

しい。急な残業時の子どもの世話役を探すのも大変である。一度仕事をやめて、子どもの小さい間だけ専業主婦担って次に社会に出るのは大変なストレスになる。このご時世仕事を見つけれられるのかどうか……。後半略」といったように、子育て中の女性が働きやすい職場環境をつくってほしいという提言もあった。

3. まとめ

親になるまで、赤ちゃんの世話を経験した人は3割に過ぎず、実際の子育ては思ったより大変だと思う人が多いことがわかった。子育ての経験不足に加えて、近隣との関係も疎遠で孤独な育児を強いられていることが浮き彫りになった。そのため子どもにイライラしたり、自分は育児に向いていないと悩む人が多いことがわかった。なお、約3割の母親は3歳までの子どもの養育に関して、保育所を日常的に利用したいと希望しており、約半数の母親は時々集団保育を子どもに経験させたいと希望していることが把握できた。

子育てには多くの人の手助けが必要であり、母親が子どもと離れて、気分転換や気晴らしができることも不可欠である。子どももまた、母親以外の大人と触れ合う体験が必要であり、母と子の閉塞的な育児環境の改革は急務の課題である。「同じ世代の子を持つ親同士の交流はとても大切なものだと思います。母親のストレス解消にもなるし、勉強にもなるし、情報交換もできるから」といった意見にもあるように、親と子の交流の場を地域につくり、学び合うことにより、親の意識や子育て観にも変化が生じるのではと期待される。

なお、子育て中の親たちの心に生じる葛藤や悩みへの対処も不可欠である。例えば、子育ての理想と現実には大きな落差があり、実際の子育てが始まると想像していなかったことが起こる。つまり、母親の心に怒りや苛立ち、焦燥感

などネガティブな感情が生じることは予想されていなかったことであり、母親としての自信が揺らぐことにもつながっている。「こんなはずではなかった」と困惑しつつも、心の奥に葛藤や不安を押し込めて、子どもの養育に熱心な「良い母」であり続けようと懸命な努力を続けている様子もうかがえる。

こうした母親たちの複雑な悩みや葛藤を共感的に受け止め、相談に応じることが必要であろう。さらに、女性の自立への援助と男性の子育て参加などの促進について取り組むことも重要な課題である。なお、親たちの自主的な子育てサークルやネットワーク活動を支援し、子どもと大人たちが育ち合う地域づくりの活動を活性化していくことも大切だと考える。

IV おわりに

子育て中の母親たちは、子どもの養育に熱心で、できるだけことをしてやりたいと願っている。しかし、現実の子育てでは、子どもに苛立ち、感情的に叱ることも多くなっているようである。

不慣れた育児に悪戦苦闘しながら、子どもが言うことを聞いてくれないとか、反抗的な態度に傷つき、親自身が追い詰められている状況も浮き彫りになった。「良い母親」であろうと必死の努力を続けているのに、心の安心が得られないことがわかった。

また、子育てだけに束縛されずに自分らしく生きたいとか自分の時間を持ちたいという願いが強いことも把握できた。精神的な支援だけでなく、子どもを預かるなど具体的な援助が求められているといえよう。

一方、子育てを楽しんでいる親もいることが把握できた。こうした親の体験や工夫を伝え合う機会をつくることも必要だと思われる。

例えば、「接する時間が短い分、スキンシッ

プやよく子どもの話を聞くことを心がけていて、時間の長さよりはその質を高くしよう、と考えています。十分ではないし、すばらしい子育てとはいえないかも知れないけれど3歳までにもらうかわいらしさの感覚や愛しい気持ちの体験のお礼を、この子たちが成人するまでに返していこうと考えています。親に大切にされた子どもはきっと他の人のことも大切にできるだろうと思っています」という意見のように、働く母親なりの工夫や努力がなされ、子育てを楽しんでいることがうかがえるものもあった。

あるいは、「今振り返れば、正直なところ子育ては『～してあげなくてはならない』の一方通行でしんどいだけのものでした。けれど、カウンセリングを通して自分を見つめ直し、今は子どもと一緒に楽しむ努力をしています」と書いてくれた母親のように、人とのつながりの中で、子育て見つめなおし、肩の力を抜いて、子育てをすることができるようになった人もいた。

父親の子育てに関しても、「夫がまだ自分の遊び、仕事を中心に考えているときに長女が生まれ、まじめな私は負担をかけないように一人で頑張って互いにストレスになってしまった。長男が生まれてからは状況が一変、次第に夫も育児の楽しさを分かって、今では次女とも玄関で握手し、送られるほど親子関係はよいと思う」といった示唆に富む記述もあり、母親だけが子育てをがんばるのではなく、父親を巻き込むことで父親も育っていくことが把握できた。

こうした同世代の親たちの経験を知ることは、親としての安心にもつながるのではなかろうか。地域の子育て支援の拠点が、情報発信の基地になり、子どもとのかかわりなどの知恵を伝えることも今後の取り組みとして重要だと思われる。

以上、この調査を通じて、子育ての実態や社会的支援について、さまざまな角度から検討することができた。今後も、さらにヒアリング調

査等を行っていきたい。

（本研究を行うに当たり、ご協力頂きましたお母様方、保育園、幼稚園の皆様方に深く感謝いたします。）

参考文献

1. 拙著「今日の子育て不安・子育て支援を考える。『立命館大学人間科学研究』第7号。2004年 pp.75～86 立命館大学人間科学研究所
2. 国立教育政策研究所「早期教育研究会」編「『早期教育』に対する保護者の意識調査」2001年
3. 永田えり子「母親になるということ」藤崎宏子『親と子 交錯するライフコース』ミネルヴァ書房 2000年 P.83
4. 柏木恵子『子どもという価値—少子化時代の女性の心理』中公新書 2001年
5. ステラ・チェス, アレクサンダー・トマス, 林雅次監訳『子どもの気質と心理的発達』星和書店 1981年
6. 厚労省・次世代育成支援施策の在り方に関する研究会「社会連帯による次世代育成支援に向けて」2003年

(2005.2.23. 受理)